

## 空き缶を拾う女の子

それは5月11日の夕暮れのことだった。

私は鳴和のバス停でバスを待っていた。なかなか来ないバスを待ちながら、風に吹かれつつ人間観察をしていた。

しばらくしてのことである。神谷内の方向から女の子が2人歩いてきた。ご近所星稜高校の女の子2人連れである。この子たちバス停でバス待ちをするのかなと思っていたら、歩道を下りて、なぜか車道の方を歩いていくではないか。そして後ろを歩く女の子がふとしゃがむのである。えっ? いったい何するの? と思ったら、車道の端に落ちている空き缶を拾うではないか。

その空き缶はバス待ちをする人からは見えない位置にある。歩道と車道には段差があるので、歩道からは見えない端っこに落ちているのだ。

あらら、なんて殊勝な子、と思ったら、さらにバス停の前でもう1個の空き缶を拾った。両手に空き缶を持ちそのまま歩いていく。そして、バス停の横にある小坂農協の前のゴミ箱にその空き缶を捨てていった。そのゴミ箱の前にはもう1個空き缶が落ちていて、それまでも拾って捨てていった。

彼女は都合3個の空き缶を拾い、ゴミ箱に捨てていったのである。その姿は、全くもって自然な感じだった。歩くついでに、空き缶があったから拾っていった、何か特別なことをしようと思ってやった風ではなく、本当に自然な感じだったのだ。空き缶を捨てていった後も、それまでと同じような速さでまた橋場町方向へと歩いていった。

私はいたく感心してしまった。今時の女子高生というと、ミニスカ、茶髪で、勉強しとるんかいね! という風体で、おまけに食べたお菓子の包み紙なんか平気で捨てる人間をよく見かける。しかし、世の中捨てたもんじゃない、と彼女を見ていてつくづく思った。まだまだ、しっかり者の高校生がいるものだったと思った。何か、あまりにも自然で、そのとき吹く風のように、さっと来て、空き缶を拾って捨てていき、風のように去っていった彼女を見て、その夕暮れはいい気分になったものである。

だがしかし、よく考えてみると、そのようなところに空き缶を捨てたたわけ者がいるということである。そこは車道の端っこだから、きっと走っている車の窓から投げ捨てたものである。ころころと転がった空き缶が、車道と段差のある歩道のところまで転がってきて止まったというところであろう。こんなことするの大馬鹿者がいるのである。殊勝な女子高生がいるかと思えば、平気で空き缶を捨てるたわけ者の人間もいるのである。空き缶を窓から投げ捨てる者は、いったい誰が始末すると思っているのだろうか。もしも自分の家の庭に次々と投げ込まれたら怒ることだろう。しかし、自分が人の家の前に投げ捨ててもちっとも何とも感じないのである。困ったものである。ましてや山道なんかには、平気で捨てることだろう。私の通勤する山道も大変なゴミである。もしも自分が掃除しなくてはならない立場になったとしたら、きっと何でこんなところに捨てるんだと怒ることだろう。そんなことまで考えられないたわけ者である。自分のいやなことは人にもするな! 想像力を働かせよ! とはこのことである。

ということで諸君! 平気で道にゴミを捨てる者は大馬鹿者である。

大馬鹿者のことはほっといて、いや、大馬鹿者にはならず、風のようにさわやかな青年になることを望む!

ちかごろの **daily life** よりあれこれ